

合唱団ホームページアドレス <http://www.wiengifu.org>

# 音楽とは 横への感性なり!

2

月号

2020年2月1日  
編集・発行/  
ウィーン岐阜合唱団

## 合唱仲間と良い音楽を生み出す 大垣支部 インспекター 山田 秀子

この度、大垣支部のインспекターを仰せつかりました

指導者からの意向を団員に伝達するという中間メッセンジャーとして大切な役目だと思います。経験もなく、力不足でご迷惑もおかけすることもあるかと思いますが、精いっぱい勉強していきたく思いますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

さて私は入団して10年目となりましたが、練習の時に録音した声を後で聞く時いつも感じることは、声は心を表し、心はその状態を声に反映させるということです。以前に読んだ何かの書物でこのような言葉が書かれていました。まさに、声は心理学とでもいうのでしょうか。体が疲れているときは、声も疲れた声になり、楽しいことがあったときは、明

るく弾んだ声が出るものです。そんな繊細で正直な声を出して、私たちは心でつながりながら、良い音楽を生み出していこうとしています。それは、指導者の平光先生の理想とする音楽、芸術性に近い結果となるために、指導者と心をそろえるということだと思ふのです。そのためには、毎回の練習の時に教わったことを忘れないようにし、教わりっぱなしにしないということでしょうか。では、忘れないようにするにはどうしたらいいのかをまず考えていこうと思います。そして、合唱仲間と良い音楽を生み出していくために、少しでもお役に立つことができますように努力してまいりたいと思います。

## 後悔したくない思い

岐阜本部バリトン (パートリーダー) 坂井 俊郎

今年の年回りは子年(ねどし)で、60年に一回の巡り合わせという。この世代は皆がみな適応能力の高さ・我慢強さ・几帳面の三つを併せ持っているというが、現実の自分は不器用さがずぼらな衣でふんわりとコーティングされているような人間であることは見ての通りの事実『新年度はバリトンのパートリーダーを頼むよ。』と団長から告げられたときは、とっさに返すことばがなかった。団員として7年を経た今、リーダーらしい証もなく恥ずかしい限りである。これまでと同様に、心には自分のベストを尽くそうという思いを、背には皆さんのエネルギーを感じながら今年も頑張ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、年末のあの高山第九や定演の頃の1週間に自分が行ったことに触れたい。朝刊で「蘇一小の一年生、読書感想文で全国一位!」の見出しを見た瞬間スイッチが入ってしまった。自分の母校の1年生が日本一になったのだ、居ても立っても

おられなくなり図書館に行って借りた『魔女のろいアメ』。その年の小学校低学年用の課題図書の一冊であったが、まずその質の高さにビックリ。姉の『あら探し』がやがて『いいところ探し』に移っていく様子が心憎いほど自然につづられていた。『これを読んでこの子はどんな感想を抱いたんだろう?』ということで、小学校に行って感想文を読ませていただいた。そこには本人の思いが実に素直に背伸びもせず書かれてあって、1年生のものとは思えないほど、少なくとも自分のこの頃には考えられないレベルであった。『仲直りアメ』を作ってみたい、と見事に締めくくっていた。作者がこれを読んだら、思わずぎゅっと抱きしめるに違いない。かくして小学校に預けられた『おめでとう』の手紙はクリスマスプレゼントとして25日に本人に届けられることになった。

後悔したくないという思いが一貫して自分を引っ張っていたように思う。

# オペラチックに第九

## *La nona sinfonia operática*

岐阜本部テノール 清水克時

昨年、年末の短い期間に、連続して3回の本番で第九を唄うという、まるでプロの合唱団のような経験をしました。11/24 垂井第九、12/15 高山第九、12/22 岐阜の定期演奏会の3つです。ひとつめの垂井町音楽祭「第一部、第九を歌おう」は菅原拓馬先生のピアノ伴奏、第4楽章だけ、ソロなし。これはふだんの練習の延長上にある演奏でした。二つ目の高山の第九は全曲、もちろんソロもはいたフルコースの演奏でした。しかも「千人の第九」、大人数の合唱と100人編成の大オーケストラによるスケールの大きな演奏で、これをひとつにまとめるのは、平光先生は大変なご苦勞であったと思います。第4楽章で、バリトンソリストが威厳をもって歌いながら登場するという演出は平光先生のオリジナルだと思えますが、高山の演奏会では、平光先生がバリトンソロの砂田直規さんに、これをオペラチック *operático* にやってくれと注文されたそうです。砂田さんは、ゲネのときには合唱団のほうをふり向きかげんでしたが、本番では、しっかりと意識的に合唱団にむかって、Freude! と歌いかけました。ソリストが聴衆にむかってではなく、合唱団に歌いかけたことで、瞬時に男声合唱が反応して、ぴったり息の合ったFreude! を返すことができ、そのまま素晴らしい大合唱につながりました。東京混声合唱団出身のソリスト砂田さんだからこそ生まれた機転かと思いました。

2019年12月22日、ウィーン岐阜の第九のゲネでは、平光先生がはっきりとバリトンソリストの澤脇達晴さんに、合唱団に向かってFreude! と歌いかけるように要請していました。

第九をオペラチックに演奏するという考えは、唐

突な考えではありません。そもそも、交響曲シンフォニーの語源は、17世紀イタリアでオペラの序曲がシンフォニアと呼ばれていたことに始まります。ジョヴァンニ・バティスタ・サンマルティーニがオペラの序曲だけを演奏会用に独立させたのが交響曲のはじまりだそうです。交響曲に、はじめて合唱をとり入れたのがベートーヴェンの第九ですが、交響曲に独唱と合唱を合わせるという考えは、明らかにオペラの人気を意識してのことだと思います。ベートーヴェン第九の初演はウィーンで行われました。このころのウィーンではイタリア・オペラが流行していて、ウィーンにおけるベートーヴェンの人気はロッシニの足元にもおよばない状況でした。ベートーヴェンはそれまで、多くの作品の初演をウィーンで行ってきましたが、今回は自分の音楽がウィーンの聴衆には受けないだろうと思い、初演をベルリンでおこなうことを希望しました。しかし、ベートーヴェンの支援者であったリヒノフスキー伯爵らは、ウィーンで演奏することにこそ意味があると考え、ウィーンでの初演を求める嘆願書を作りました。その結果ベートーヴェンは第九のベルリン初演を思いとどめたそうです。

私たちウィーン岐阜合唱団は2018年1月と2019年1月に2年連続して、「オペラ人道の桜」にユダヤ人難民役で出演しました。このオペラでは、ひとりひとりの歴史を背負った難民の役を、歌いながら演じること、そして、ソロと合唱の相互作用がいかに重要であるかを学びました。2019年の第九では、オペラチックに第九を演奏するという平光先生の考えは十分に伝わり、最高の演奏ができたと思います。

## 「喜びの歌」とともに

岐阜本部 アルト 田口 宏美

第九”を歌いたいという長年の夢がかなったのは、私がウィーン岐阜合唱団に入団した 2007 年 12 月の演奏会の時でした。初めて歌う第九はオケ合わせの時から胸がわくわくするほど興奮し、本番を終えた時の熱い感動は今でも忘れません。

それから 12 年の間に何回も第九を歌ってありますが、毎回その感動は変わることはありません。時には喜びの歌どころではないような辛い時や悲しい時もありましたが、それでも喜びの歌は私に希望を与えてくれました。

第九のテーマは「人類みな兄弟」という壮大なものです。ベルリンの壁が解放された年のクリスマスに、敵対していた国々が参加して第九が演奏されました。これほどまでに人々の心を一つにする歌は他にはないような気がします。そして、一度歌うとまた歌いたくなる、そんな不思議な力が第九にはあります。もちろん、私もその力に惹かれてしまった一人です。第九は聴くより歌うほうがより素晴らしい、と聞いたことがあります。それほどまでに歌い手を引き付けるのは歌った者に

しかわからない一体感だと思います。歌い終えた時、この仲間と歌えてよかったと思えるのは昨年話題になったラクビーの「One Team」とまさに同じではないでしょうか。

「喜びの歌」の「喜び」は、歌い手の数だけ様々にあると思います。歌い手それぞれの「喜び」を「第九」によって一つにまとめて歌い上げる、それが人々に感動を与えているのだと思います。

来年私が卒業した高校「千葉」で、創立 100 周年記念として第九の演奏が行われます。指揮者、オーケストラ、合唱団など卒業生などが中心になります。もちろん私も参加しますので、いまからとても楽しみです。高校時代は合唱にはほとんど興味のなかった私ですが、第九との出会いが大きな言い方をすれば人生を変えてくれたと思っています。このような出会いを作ってくくださった平光先生、ベートーベン先生には本当に感謝しかありません。

これからも「喜びの歌」をできる限り歌い続けていきたいと思っています。

### 戴冠ミサ曲 ハ長調 K317 (モーツァルト作曲)

ミサ曲というのは、教会の典礼文に作曲された音楽のことである。モーツァルトは生涯に 20 曲を超えるミサ曲を書いたが、その大部分は、ザルツブルグの大司教につかえた青年時代に作曲されたもので、それらの中で最もよく知られているのが、この戴冠式ミサ曲と呼ばれている。

モーツァルトは、21 歳から 22 歳にかけて、新しい就職口を求めて、マンハイムからパリへと旅行した。この旅行は初恋に敗れ、最愛の母をパリで失うなど、苦難と悲しみに満ちた時だった。そうした中で、彼は人間的にも、音楽的にも一段と成長した時期だと言われている。その直後に作曲されたのが、この曲で、それまでの宗教音楽にみられた讚美歌風の単純な様式とは打って変わり、きわめて力強い構成をもった、荘厳な宗教音楽となっている。

この曲に付けられた「戴冠」という名称は、この曲がザルツブルグ近郊のマリア・ブライン教会の年中行事となっていた聖母像の戴冠式のために作曲されたからで、初演はザルツブルグ大聖堂で、1779 年のこの日に行われている。

# 2~4 月練習予定

練習時間は 18:45~20:45 です(18:30 までに集合しましょう)

月 日	岐 阜	月 日	大 垣
2 月 6 日 (木)	長森コミュニティーセンター	2 月 7 日 (金)	大垣市南地区センター
2 月 13 日 (木)	長森コミュニティーセンター	2 月 14 日 (金)	大垣市南地区センター
2 月 20 日 (木)	長森コミュニティーセンター	2 月 21 日 (金)	大垣市南地区センター
2 月 27 日 (木)	長森コミュニティーセンター	2 月 28 日 (金)	大垣市南地区センター
3 月 5 日 (木)	長森コミュニティーセンター	3 月 6 日 (金)	大垣市南地区センター
3 月 12 日 (木)	長森コミュニティーセンター	3 月 13 日 (金)	大垣市南地区センター
<b>3 月 19 日 (木)</b>	<b>岐阜市北部コミュニティーセンター</b>	3 月 20 日 (金)	大垣市南地区センター
3 月 26 日 (木)	長森コミュニティーセンター	3 月 27 日 (金)	大垣市南地区センター
4 月 2 日 (木)	長森コミュニティーセンター	4 月 3 日 (金)	大垣市南地区センター
4 月 9 日 (木)	長森コミュニティーセンター	4 月 10 日 (金)	大垣市南地区センター
4 月 16 日 (木)	長森コミュニティーセンター	4 月 17 日 (金)	大垣市南地区センター
4 月 23 日 (木)	長森コミュニティーセンター	4 月 24 日 (金)	大垣市南地区センター

## 嘆 き

私は、若い頃、熱心に働きました。その結果、私は認められ尊敬されるようになりました。そのお陰で 65 歳のとき、堂々と引退することができました。そんな私が 30 年後の 95 歳の誕生日に、どれほど後悔の涙を流したかしれません。

私の 65 年の生涯は、誇らしく堂々としていましたが、その後の 30 年の人生は、恥ずかしく悔やまれます。悲痛な人生でした。

私は引退後「もう十分生きた。残りの人生は、おまけみたいなものだ」と考えたが苦しみに死ねることだけを待っていました。虚しい希望のない人生。そんな人生を 30 年も過ごしました。30 年

という時間は、今の私の年齢、95 歳の 3 分の 1 にあたる、とても長い時間です。もし、私が退職したときに、あと 30 年生きられると思えば、こんな風に生きてこなかったはずです。その時私は、自分は年老いた。何かを始めるにはもう遅いと思っていたのが、おおきな過ちでした。

私は今 95 歳ですが、意識は明瞭です。あと 10 年、20 年、生きるかもしれません。私はこれから、やりたかった語学の勉強を始めようと思います。その理由はただ一つ。10 年後に迎える 105 歳の誕生日に 95 歳の時、なぜ何も始めなかったかと後悔しないためです。

この文章を書いたのは、韓国の湖西大学設立者の姜錫圭博士です。彼は 100 歳の頃にも講壇にたち、自分が人生で学んだ知恵を社会と分かち合い、103 歳で亡くなりました。彼は、95 歳の時に自分には老年期の設計がなかったことがわかり、後悔しました。長い時間でも、短い時間でも、意識的に生きなければ、時間はただ流れていきます。「水は、開いた水路の通りに流れる」という韓国の諺があります。あなたが、40 歳以上なら、あなたの人生の後半期をどこへ流すのか。その道を新たに開くときが来たときと自覚して準備する必要があります。

### ベートーヴェンの名言

- ・多くの人々に幸せを与えること以上に、崇高で素晴らしいものはない。
- ・お前にとって、お前のうちにしか、お前の芸術によるほか、幸福はないのだ。
- ・有限な存在でありながら、無限の精神を持つ私たちは、ひたすら苦悩し、そして歓喜するために生まれてきた。
- ・神がもし、世界でもっとも不幸な人生を私に用意していたとしても、私は運命に立ち向かう。
- ・真に称賛できる人物とは、逆境に直面した時に、自分の生き方を貫ける人間なのだ。
- ・この世でなすべきことは、たくさんある。すぐになせ。
- ・運命は耐え忍ぶ勇気を人間に与える。